

年年歳歳

ねんねんさいさい

札幌月寒高校図書局

2024年12月20日

編集

花鳥風月

校門をくぐったら見えていた銀杏の木もその葉を落とし、木の下に黄色い絨毯を作っています。息を吐けば白い蒸気が立ち上り、本格的な寒さとともに冬を感じる季節になりました。

さて、毎年この時期になると私達は否が応でも雪の存在を意識します。ウィンタースポーツを楽しむためには雪は必須ですし、あたりを真っ白に染め上げる雪には心が踊り、毎年この時期を楽しみにしている方もいるのではないのでしょうか。

そんな雪は、雪の結晶が集まることで成り立っています。雪の結晶でみなさんがイメージする、六角形で花のような形をした結晶は樹枝六花(じゅしろっか)といい、その他121種類と結晶の種類は私達の想像をはるかに超える数で存在します。

雪の結晶は、水の分子が氷になるときに六角柱の形でくっついたものがベースとなり、周りにどんどん水蒸気がくっついていくことで成長します。結晶の板と枝は、結晶が置かれた環境によってその成長の仕方が異なり、例えば樹枝六花は、雲の水蒸気量が多く-15度のときに枝がよく伸びるのです。

これから降ることが日常になっていく雪ですが、ふと足を止めミクロな結晶の世界に思いを馳せるのも良いのではないのでしょうか。()

図書館リポート

Vol. 40

今回は、図書館に新たに設置されたコーナーについて紹介します。

絵本の冬 ええ本の冬

今回図書館では、12月にちなんで、冬に関連した本のコーナーを設置してあります。

私は冬の本で言うと、絵本が好きです。特に、食べたもので体が変わる『ばけ×4!ばけたくん』という絵本が大好きです。子供の頃に読んでいた本を読み返してみると、昔の思い出が蘇ってくるのかもしれません。

冬の本は冷たい暗いイメージを題材にしたものだと思うがちですが、読んでいると冬だからこそ感じられるほっこりした本もあるので、寒い冬休みはぜひ温かい室内で本を読んで過ごすのをオススメします。()



サン＝テグジュペリ 著



『星の王子さま』

皆さんは、これまで様々なことを経験し、酸いも甘いも噛み分けて生きてきたことだろう。そして、そろそろ日本の成人年齢である18歳へ近づき、「大人」に差し掛かってきた頃だと思う。

だが、長年の学校教育によりその思考は凝り固まり、いつしか「つまらない大人」になろうとしていないだろうか。私はそれをひどく危惧している。そこで、私がおすすめしたい本はサン＝テグジュペリの『星の王子さま』である。もしかしたら読んだことのある人が大半を占めるのかもしれないが、今一度読んでみてほしい。

優しい王子さまと飛行士で砂漠に不時着した僕が織りなす物語は何よりも美しい。王子さまと過ごすうちに僕は少しずつ王子さまの生い立ちを知っていく。そして僕は、純粋な王子さまに感化され少しずつ童心を取り戻してく。

読み終えたとき、あなたも純粋で優しい心を手にするだろう。ぜひとも皆さんには童心を忘れずに「大人」になってもらいたい。()



このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

『V.T.R.』は辻村深月作品であって、辻村深月が書いたものではない。というのも、本書は『スロウハイツの神様』に登場する作家、「チヨダ・コーキ」が書いた作品なのだ。『スロウハイツの神様』とは同じく辻村作品であり、クリエイターの卵である住人たちが暮らす「スロウハイツ」で物語が進んでいく。上巻では、住人たちの日常や、クリエイターがゆえの少しズレているころ、葛藤、譲れない信念などが伺える。そして下巻では『チヨダ・コーキの天使』が鍵となっている。

チヨダ・コーキの作品に沿ってなされた十年前の殺人事件があった。その作品こそが『V.T.R.』である。そのころの彼は事件によって絶望しているが、「天使」の存在が彼を支えていた。その「天使」とは一体誰なのか。そして「スロウハイツ」の住人たちの関係はどうなっていくのか。下巻を読む手が止まらないことだろう。

『V.T.R.』は物語から飛び出してきた作品なのだ。この作品を読むことによってさらに「チヨダ・コーキ」という人物が深まっていく。ぜひこの3冊を読んで、辻村深月ワールドを体感してほしい。()

スピンオフ度



読みやすさ度



スピード度



伊坂幸太郎 著

『終末のフール』

「八年後に小惑星が衝突して、地球は滅亡する。」突然こんなことを告げられたら、あなたは何を思うだろうか。本作は、そのような予告がされてから五年後、仙台にある団地が舞台だ。余命三年という残された時間の中で、団地で暮らす住民たちは自らの人生を見つめ直す。

迷いの中で生まれる新たな命に対する選択、軋轢が生じた家族の再興、過去に受けた痛みに対する復讐。それぞれの主人公が迷い、悩みながらも生きる姿は実に魅力的だ。

また、ひとつひとつが完全に独立した短編というものではなく、絡まった糸のように登場人物がリンクしているところも、見どころのひとつだろう。

この冬にぜひ、終わりに近づいた世界の様子を少しでも覗いてみてほしい。()



辻村深月 著

月高人気図書TOP5

ここで2024年の貸出冊数トップ3をご紹介します！ とくにご覧あれ！

1

『ブルーピリオド』 著：山口つばさ

主人公、矢口八虎は高校2年生である。彼には好きなことがなかった。物足りない感覚に葛藤したまま、夜明けまで酒を飲み、仲間と遊んで暮らしてきた。けれども成績優秀、八方美人。周りからの評価は高いものであった。

ある日の美術の授業で、好きな景色を描くことになった。彼はそこで初めて、自分を表現することを知り、感動を知ったのだ。自分の絵に共感されたことに、涙すらこぼした。それゆえ彼は、東京藝術大学に入ることを決意する。周りの目など気にせずに行けることは、他になかった。

今年映画化も果たした本作はこれからも人々を魅了し続けるだろう。()

2

『成瀬は天下を取りに行く』 著：宮島未奈

本作は、破天荒な女学生、成瀬あかりと、周囲の人々との日々が収録された短編集。この本の魅力は、成瀬あかりの生き様にある。

今年はなにかに挑戦してみようかしらと、そんな勇気をもらえる一作。我が道を征く彼女の生き様に刮目せよ。()

3

『チ。～地球の運動について～』 著：魚豊

この本は15世紀のヨーロッパ、天体が地球の周りを周回しているという「天動説」が一般論とされている時代で、「禁忌」とされる地動説を研究する天文学者達を描いた作品である。

話のテーマが「地動説と天動説」なので一見、話を理解するには相応の知識がいるように思うかもしれないが、実際は「天文」について中学程度の知識しかない私でも不思議と心が熱くなっていく、そんな本であった。

ここで一つ、作中での個人的名場面——「ラファウ」という人物のある場面について語らせていただきたいと思う。彼はあらゆることの利益を常に考え理屈を重んじるような合理的な人間なのだが、一度地動説について説かれ、自らに不利益しか生み出さない地動説研究の魅力に取り憑かれてしまい、研究を始める場面があるのだが、非常に合理的なはずな彼をここまで狂わせるとは、どれだけ地動説という説が当時革新的だったか良く表れている名場面なのである。

また、今年の10月にマッドハウスがアニメを制作し、話題を呼んだのも記憶に新しい。

まだこの本を読んだことのない人は借りて読むもよし、自ら買って読むもよし、とりあえずアニメを見てみるもよし、どのようにしても一度はこの作品に触れてみて登場人物の生き様に酔いしれてほしいと思う。()

☆意外な一冊……『雪国』 著：川端康成

皆さんは北の国、北海道に住んでいる。そして、長年雪と過ごしてきた。あなたが雪を初めて見たとき、さぞ感動したことだろう。だが、今ではその感動をすっかり忘れて、雪のことを忌々しく思っていないだろうか。

川端康成の『雪国』である。正直に言うと、私は一度この本を読んだが、内容が難解で、うまく解釈しながら読むことができなかった。だが、彼の用いる独特の表現は本当に美しい。それだけを目当てにこの本を読んでみてもいいと思う。それくらい情景描写が素晴らしいのだ。

これから本格的に雪が降るだろう。そしてあたりは雪景色となる。どうか、この本を読んでから、雪の積もった街に出かけてみてほしい。きっと見える世界が違ってくるはずだ。()

	タイトル	著者
1位	ブルーピリオド	山口つばさ
2位	成瀬は天下を取りに行く	宮島未奈
3位	チ。地球の運動について	魚豊
4位	星を編む	凧良ゆう
5位	雪国	川端康成



山口つばさ 著
講談社